令和２年白老町議会人口減少に対応する政策研究会会議録

令和２年　８月３１日（月曜日）

開　　会　　午前１０時００分

閉　　会　　午後　０時０２分

○会議に付した事件

協議事項

１．白老町が自然増と社会増に転換するための戦略（政策・事業）の取り組みについて

○出席委員（８名）

座　　長	大渕紀夫君	副座長	佐藤雄大君
委　　員	西田祐子君	委　　員	氏家裕治君
委　　員	久保一美君	委　　員	長谷川かおり君
委　　員	貳又聖規君	委　　員	森　哲也君

○欠席委員（なし）

○説明のため出席した者の職氏名

企画課長	工藤智寿君
企画課主幹	温井雅樹君
企画課主任	鈴木　哲君

○職務のため出席した事務局職員

事務局長	高橋裕明君
主　　査	小野寺修男君
主　　任	村上さやか君

人口減少に対応する政策研究会（第５回）

【調査事項】

事務調査：人口減少に対応する政策研究について

●白老町が自然増と社会増に転換するための戦略（政策・事業）の取り組みについて（企画課）

○氏家委員　子育て環境を整えることがまちの人口増加につながるものなのか。何をすると白老に魅力を感じて来てもらえるのか。施策を打っても結果に結びつかない。若い人の賑わいを他のまちで見たときにヒントを得たような気がした。その中で白老が今後どうあればよいのかを考えるものである。このまちの環境をどう生かすのかが大事であるがどう考えるか。
○工藤課長　総合戦略をつくるに当たって社人研の数字などかなり厳しいところからのスタートとなった。分析にあっては社会増を増やす取り組みが第一であると考えている。令和２年予算編成時に戦略ができていなかった。
○氏家委員　まちで雇用を生むのは難しい。働く場所は隣まちでもよい。そのベッドタウンとして白老を選んでもらえるような施策を数年先まで見据えて計画できないか。行政としての考えでもって実行策を練ってほしい。
○工藤課長　企画課にとどまらず、他課や若い職員、庁外の人やプロジェクトなど、町全体で取り組んで、様々なところから取り込めるものを大事にしたい。取り組みを実行出来る体制をつくりたい。
○氏家委員　取り組みは足元が見えるよう、町民の利益にどうつながるかを考えることが重要である。
○久保委員　白老は親子が休日にくつろげる公園などの場所があまりないと思う。
○工藤課長　白老にはそのような公園がないことは非常に認識している。同時にそのようなものを町として持てることの大切さを感じている。
○久保委員　一からつくろうとせず、既存の公園に手を加えてよいものにする手法が考えられる。
○長谷川委員　運動公園の親水施設の整備はどのようになっているのか。退職等でまちを離れる人がいる。転出を食い止める対策はどのようなものか。
○工藤課長　数年前に親水施設を整備した経緯があった。既存のものを生かすことは、維持管理の視点から検討する必要がある。転出は就職や進学などがある。子供のいるところへいく親もいる。医療機関のより充実したまちへ行く人もいる。また、退職後に転入し体力的に難しくなって転出する人もいる。子供がそばにいるなら転出せずに済むのではないか。
○西田委員　まちづくりに足りないものは福祉の関係ではないかと思う。公園を主に利用するのは誰かを具体的に考えて取り込むことが福祉の視点である。ターゲットを的確に見極めてほしい。まちづくりの視点は福祉の視点である。空き家対策は深刻である。空き家を廃屋にしてはいけない。持ち家があるためになかなか公営住宅に入れない場合があると聞く。そういったことへの配慮が施策へ反映されることを望んでいる。
○貳又委員　ウポポイ開業に伴う人口増減の状況について、年代比や男女比はどうか。
○工藤課長　比率の把握はしていないが、ウポポイで働く職員で転入者の増加は 49 名で、全体の増加は５月末で合計 76 名である。
○貳又委員　白老にとってはありがたい状況である。ウポポイで働いている人は白老に住んでいるのか。また、職員が望んでいることはどのようなことなのか。
○工藤課長　働いて暮らせるまちにしていくため、家賃補助制度を活用してもらえるようにしなければならない。町外から働きに来ている人の生の声を聞きたいと考えている。
○貳又委員　政策形成の視点から述べるわけだが、町民の声を聞いていると思うが、議会と町のやりとりを振り返ると、議会の声が町へどのように反映されているのかということでは、時代が変わるとともに議員も職員も変わっていく必要がある。行政だけではできないことが多いので、まちの人や団体とよく話して取り組んでいくことが求められていると思う。こんなときだからこそできることを実現してもらいたい。今ならばウポポイにいる人と意見交換するのはどうかと思う。
○工藤課長　ウポポイの職員、特に若い人の意見は重要であるので、意見を聞く機会を設けたい。

○森委員　外国人の状況はどうか、数字はあるか。
○工藤課長　外国人労働者が来日できず、労働者の不足が続いている。今持ち合わせている数字はない。
○佐藤副座長　今はコロナ対策もあってかキャンプブームである。町内でもキャンプ場がオープンして一定の評価を得ているようだ。これもまた白老のファンづくりの一つである。キャンプで来町した人が帰りに温泉に入り、お土産を買って帰るという相乗効果も見込まれる。そうした部分を踏まえてのニーズはどうか。
○工藤課長　様々なチャンネルを用意して、まちに経済的な潤いが得られることを望んでいる。行政として関わるべき部分をしっかり捉えたい。
○佐藤副座長　若い人が集える場所は、まず地元の若い人が利用できて、そこにさらに町外の人が利用しに来るようになるのが理想だと思う。座るところと自動販売機があるところに人は集まると思う。
○工藤課長　札幌のヒタルや恵庭駅のフリースペースなどから場所づくりが重要であり、何をせずとも過ごせる場所が必要である。北広島市役所内のフリースペースに学生が帰りに寄っている。ファンづくりに資する暮らしやすいまちづくりの重要性をさらに感じている。
○大渕座長　データの収集と分析が重要である。目標を達成するための手立てを考えることと、具体的な戦略と戦術が行政には必要である。今後は具体的な議論を議会と町が交わし、共有して取り組まないとならない。
○工藤課長　腹を割って意見のやりとりをしたい。そして、議会の声に応えられるようにしたい。

●今後の研究会の進め方について

○大渕座長　協議が必要なことについて確認する。①講演会、10 月 28 日（火）午後、アイヌ民族文化財団今井専務理事を講師として開催で決定した。具体的な示唆が得られると考えている。案内は全議員、職員、報道に出す。政策研究会の講演会のため町民には案内しない。その日は夜に懇親会をしてさらに話をしたい。懇親会は今井専務理事と政策研究会メンバーと事務局で開きたい。議長にも来てもらえるよう声を掛ける。
②企業訪問、貳又委員をリーダーとして、長谷川委員、久保委員に具体化してもらいたい。座長及び事務局と調整しながら準備を進め、随時報告をしてほしい。アイヌ民族文化財団は若い職員向けのアンケートに協力してくれる模様である。
③地域おこし協力隊との意見交換会、現隊員と退任した隊員の両方と行う。なぜ白老に来たのかについてよく聞いてみる。企画課に頼むとよいか。今の時点で委員の担当者を決めない。年内に具体化するよう計画をしたい。
④行政視察（若者の自然増と社会増の取り組みがある先進地自治体）。類似の市町村がよい。冬でも行けるならと思うが時期は検討する。行きたいまちについて案があれば教えてほしい。今後具体的に検討していくということでよいか（一同：よろしい。）取り組んだ結果として実績を残しているまちがよい。（氏家委員）
⑤資料（外国人労働者）、資料の内容、入国の推移、年齢構成。就労ビザで来ている人はどれくらいいるのか。（人口増に貢献するのではないか。）白老の人と結婚している人はいるのか。（できるのか、難しいのか。）人口増につながるものであるから視野に入れておく必要がある。別立てで調べて、この調査を一つ加えてみてはどうか。外国人労働者がまちの支えになっているところがある。そのような状況を調べることも重要である。（西田委員）
○髙橋局長　増田寛也氏による自治体消滅論は衝撃的なものであった。人口減少の直接原因は、20 歳から 45 歳までの女性がまちにいないために子供が生まれないことである。出産をする女性が暮らしていないと子供が増えない。ウポポイでは町外から女性が働きに来ることが想定されていたにも関わらず、今はあまりそれを捉えていないように思われる。今後の検討ではターゲットを明確にするべきである。
○大渕座長　若い女性が暮らすまちづくりのために何をするのかということである。視点を絞って次回の会議で具体的にする。
○貳又委員　アンケートと企業訪問の連動の必要がある。アンケート担当者２名と調整して進めたい。企業訪問の検討には佐藤副座長を加えてほしい。
○大渕座長　企業訪問は貳又委員を筆頭に４人で構成する。座長と事務局とよく話ながら進めてほ

しい。いずれも議会としてのルールを守って進めていきたい。